東南アジア研究センター図書室

鴨川沿いの旧京都織物工場の建物に，昨年8月13日に移転した。東南アジア研究センターは，はじめ現地における調査・研究活動が中心で，図書資料の充実に余り重点がおかれていなかった。3年前から，図書資料の整理と充実に力を注いでいる。図書室は，主としてセンターの教官およびセンター研究参加者の研究に利用されている。閲覧室兼事務室と書庫の2部屋で，蔵書数は約5,600冊，そのうち半数近くが東南アジア地域関係の本であるが，それと平行して人類学，経済発展論などの専門書の収集にも努力している。タイ語やインドネシア語などの現地語文献の充実にも努めているが，まだ未整理の段階である。

購入雑誌は，和洋合せて86種類，その他に国内・国外の諸団体との図書交換を通じて幅広い分野の雑誌を入手している。特に東南アジア地域に関する雑誌には貴重なものが多い。地図については，1万枚を越える東南アジア各地域の地図を有し，目下，その整理と目録作りの段階である。山積みになっている未整理本の中にあってあんな風にもしたい，こんな風にもしたいと考えるとき，気が遠くなりそうな日日である。

大型計算機センター図書資料室

当室は，大型計算機センターの3階，吉田山が迫って見えるところにある。昭和44年にセンターが発足して以来4年目の小さな図書室だが，図書資料室という名称が示すように，単に図書や雑誌の収集だけではなく，計算機にまつわる雑多な資料（計算機のマニュアル，本センターに登録されたサブルーチン・ライブラリー等々）を保管する役割も持っている。そして，センターが大型計算機の全国共同利用の名のもとに運営されているように，当室も大型計算機の全国の利用者に開放されており利用者の所属分布はひろい。

現在は2名で業務を行なっているが，当センターの広報やその他の資料の編集事務も仕事のひとつであり，なかなか図書業務に専心できないのが悩みである。センター自体のスペース不足のため，冬期には，プログラムのデバッグをする利用者の控室のようになる。計算センターというあわただしい，人の出入りのはげしいところで，いかに図書室としての静寂を保っていくかが大きな問題となる。今年になってマットを敷き，ブラウジング・コーナーらしきものを設けたので大分改善されたが，やはり掛員が注意しなければ，図書室らしい雰囲気を保てないのが実情である。このように，いかにも原始的な悩みばかりを抱えているが，今後とも研修などに参加していきたいと思っている。なお，蔵書数は現在399冊，外国雑誌50種，国内雑誌15種である。

あとがき；数日前，本館2階の閲覧室窓口に松葉杖の学生を見かけた。本館の階段は一段一段が高く，しかも急角度であるため，ご本人が階段を上ってくるのはたいへんだったろう，と気の毒にかんじた。実はそれと同じようすを，本年3月の入試のときに見たことがある。松葉杖をついた一人の受験者が，友人に荷物を持って貰いながら，うしろ向きに一段一段づつ階段を上っているようすをみて，ふと考えさせられた。

◇いまの大学施設は，身障者のことを考慮にいれて設計がなされているだろうか。否であろう。図書館もその例にもれない。公共図書館でも考慮されているところがどれだけあるだろうか。身障者の人数がほんの一握りであるからといって切捨てられない問題であるように思われるが，どうであろうか。　（武内）

京都大学附属図書館報「**静脩**」Vol. 9, No. 2（通号45号）1972年9月25日発行・編集発行人
岩猿敏生　発行所：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電代表751—2111（内線）2610～2642